

第5分科会

地域社会で生かす大学の「多文化共生」教育

コーディネーター：金 基淑 氏（京都文教大学 総合社会学部 教授）

報告者：杉本 星子 氏（京都文教大学 総合社会学部 教授）

島村 典子 氏（京都外国語大学 外国語学部 准教授）※

小島 祥美 氏（愛知淑徳大学 交流文化学部 准教授）

※プロジェクト共同担当者

南 博史 氏（京都外国語大学 国際貢献学部 教授）

青山 恭子 氏（福井県立足羽高校 教諭）

分科会概要：

グローバル化が進む現代社会において、多文化間での共生は重要な課題となっている。大学教育においては異文化理解、多文化共生、国際理解などさまざまな授業が設けられており、学生たちによる関連活動も多く行われている。本分科会では、多文化共生や異文化関連の授業を担当の先生方に、地域社会で暮らす外国系住民との交流、日本語学習サポートといった学生たちの活動の事例を報告していただき、多文化共生に必要なもの、課題、大学の役割などについて考えていきたい。本分科会での三つの報告の概要は次の通りである。

(1) 「想像力の創造力を鍛える—共生社会の構築にむけて」 杉本星子

今日、大学には学生教育や学術研究のみならず、地域の『知の拠点』として、①学問的知の社会への還元、②地域活性化への貢献、③生涯教育の場の提供という3つの役割が期待されている。とりわけ外国にルーツを持つ住民が増加し、地域の多文化共生の推進が目指されるなかで、大学はこうした役割を、学生教育の一環としての地域連携事業を通してどのように引き受けていくことができるだろうか。それは大学教育に何をもたらすのだろうか。京都文教大学の「アジア・アフリカとびっきり映画祭」と「地域でつながる日本語教室」の実践について報告する。

(2) 「地域との協働による高大連携型外国語教育の試み—福井県越前町熊谷での語学スタディツアーを通して—」 島村典子

近年、中国語教育の分野でも行政・市民等地域からの中国語ニーズが高まりつつあり、地域を視野に入れた語学教育の可能性が模索されている。本報告では、福井県越前町熊谷で実施した語学スタディツアーについて紹介する。当該スタディツアーでは、日本人大学生と中国人留学生が地域の高校生と学びの共同体を構築し、各自のリソースを活かしながら異文化理解に関連する諸テーマについて外国語でプレゼンテーションを行った。また、農作業等を通して地域住民との交流も実現した。事前学習や振り返りアンケートをもとにスタディツアーの教育効果を分析し、課題点や今後の展望について述べる。

**(3) 「外国人の子どもが抱える教育問題の解決をめざして一東海地域における大学生
×NPO や行政等の実践から」**

小島祥美

地球規模の課題を自分ごととして捉え、グローバルな視野で地域社会が抱える課題解決に貢献できる人材をめざし、大学での授業づくりを行っている。いずれの授業でも、学外の各関係者からのご協力なしでは実践できない。本報告では、ゼミ生（2～4年生）を対象にNPO や行政などと連携して地域課題の解決に取り組んできた①自己肯定感を高める活動、②進路や進学につながる活動、③相手の気持ちを考える海外でのワークキャンプを事例に、卒業後の学生たちの姿なども紹介しながら報告する。